



文化財愛護
シンボルマーク

北条町埋蔵文化財報告書22

Hōjō
鳥取県東伯郡北条町



Magari

曲遺跡群発掘調査報告書 2

Sugamine Nagatani
曲管峯長谷遺跡

曲233号墳

1997. 3

北条町教育委員会



Hōjō
鳥取県東伯郡北条町

Magari

曲遺跡群発掘調査報告書 2

Sugamine Nagatani
曲管峯長谷遺跡

曲233号墳

1997. 3

北条町教育委員会

序 文

本町は、鳥取県中部を流れる天神川左岸に位置する総面積21km²の小さな町にもかかわらず、県下有数の古墳密集地帯であります。特に、本町南部を占める丘陵地帯においては、土下古墳群、曲古墳群、島古墳群、北尾古墳群を中心として、狭い丘陵上に総数600基にのぼる古墳が存在しています。また平野部においても縄文時代前期から晩期にかけての大量の土器、石器が出土し、島式編年として広く知られる島遺跡を有することから、当地の文化面の繁栄の姿が想像できます。

しかしながら、最近のめざましい開発事業のなかで、これらの埋蔵文化財のおかれている立場は、必ずしも安全であるとは言えないため、埋蔵文化財の保護に日々努力していくことが私たちの責務であることを再認識する次第であります。

ここに報告する曲管塚長谷造跡、曲233号墳の発掘調査は、県営西曲地区ふるさと農道工事に伴い行われたもので、北条町教育委員会が主体となり鳥取県倉吉地方農林振興局をはじめ、地元関係者と綿密に連絡を取り合い協議を進めてまいりました。その結果、竪穴式住居4棟、主体部を含む箱式石棺2基を発見するに至り、このことにより当時の文化、生活の様相の一端をうかがい知ることができました。

調査にあたっては、鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センターのご指導はもとより、地元作業員、その他調査関係者各位のご理解、ご協力を賜り、ようやく報告書を発刊することになりました。ありがとうございました。ありがとうございます。

なお、これを契機といたしまして、本町の文化財保護に対し、一層の努力を重ねてまいる所存であります。今後とも各位のご理解、ご協力を切にお願い申し上げます。

1997(平成9)年3月

北条町教育委員会
教育長 吉田俊夫

例　　言

1. 本報告書は、平成8年度、県営西曲地区ふるさと農道工事に伴い、鳥取県倉吉地方農林振興局地域整備課の委託を受けて、北条町教育委員会が主体となって実施した北条町字「管峯」、「長谷」、「苅山」地区等の、埋蔵文化財発掘調査記録である。

2. 調査体制は以下の通りである。

　調査団長 吉田俊夫（北条町教育委員会教育長）

　調査指導 山井雅美（鳥取県埋蔵文化財センター）

　調査員 松本達之、宇田川 宏、西村勝義、日置条左エ門

　前田明範（以上北条町文化財保護委員）

　清水直樹（北条町教育委員会教育課社会教育係主事）

　事務担当 桶口和夫（北条町教育委員会教育課社会教育係係長兼社会教育主事）

　調査協力 松本 哲・門脇豊文・影山和雅・福田寛子・桶口友枝

　木村聰子・川本美佐子・井上三千代・須山加奈子

3. 本書の執筆・編集は清水直樹が行った。

4. 遺構の実測、図面作成、写真撮影は調査員及び中原由香里、福田香織が、遺物の実測・遺構図、土器の浄書は福田・桶口・川本・井上・木村が行った。

5. 本書に使用した方位は全て磁北を示す。

6. 図面、写真、出土遺物等は北条町教育委員会が保管している。

目 次

序 文

例 言

目 次

挿図目次、挿表目次、観察表目次、図版目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	1～2
第3章 調査の結果	5
第1節 調査の概要	5
第2節 曲管峯長谷遺跡 A区の調査	5
第3節 曲管峯長谷遺跡 B区の調査	7～8
第4節 曲管峯長谷遺跡 C区の調査	11・14
第5節 曲 233 号墳の調査	15・18
第4章 まとめ	19～21
第5章 おわりに	21
報告書抄録	24

挿 図 目 次

挿図 1 曲管峯長谷遺跡A区・B区・C区、曲 233 号墳位置図	3
挿図 2 北条町遺跡分布図	4
挿図 3 曲管峯長谷遺跡A区全体遺構図	6
挿図 4 曲管峯長谷遺跡A区出土遺物実測図	6
挿図 5 曲管峯長谷遺跡B区全体遺構図	7
挿図 6 第2竪穴住居跡遺構図	9
挿図 7 曲管峯長谷遺跡B区出土遺物実測図	10
挿図 8 曲管峯長谷遺跡C区全体遺構図	11
挿図 9 第3竪穴住居跡遺構図・出土土器実測図	12
挿図10 第4竪穴住居跡遺構図・出土土器実測図	13
挿図11 曲管峯長谷遺跡C区出土遺物実測図	14
挿図12 曲 233 号墳全体遺構図	16
挿図13 曲 233 号墳墳丘土層断面図	16
挿図14 曲 233 号墳主体部石棺遺構図	17
挿図15 曲 233 号墳周溝内箱式石棺遺構図	18
挿図16 曲 233 号墳出土遺物実測図	19

挿表目次

挿表1 北条町内遺跡一覧表	4
---------------	---

観察表目次

A区・B区(1~17)	22
C区・曲233号墳(18~32、S1)	23

図版目次

図版1 管峯長谷遺跡遠景、A区東側完掘状況、A区西側完掘状況、A区SI-01土層断面	
図版2 B区SI-02完掘状況、中央ピット完掘状況、B区北西側完掘状況	
図版3 C区SI-04完掘状況、曲233号墳遠景、曲233号墳主体部調査前	
図版4 曲233号墳検出状況、曲233号墳主体部検出状況、曲233号墳主体部完掘状況	
図版5 曲233号墳南側周溝部土層断面、曲233号墳周溝内箱式石棺検出状況、曲233号墳周溝内箱式石棺完掘状況、曲233号墳掘方完掘状況	
図版6 管峯長谷遺跡A区・B区出土遺物	
図版7 管峯長谷遺跡C区・曲233号墳出土遺物	

第1章 調査に至る経緯

北条町曲地内の丘陵地帯は、鳥取県特産として全国的に有名な二十世紀梨を中心とした果樹園が拓けているが、急傾斜地であり、谷も狭く細い道路しかないので、梨・柿等の栽培を遠慮してしまう農家が増えている。そこで、この地域の農道整備事業「県営西曲地区ふるさと農道工事」を行いたい旨の協議が鳥取県倉吉地方農林振興局より北条町教育委員会へあったので、本工事予定地内における埋蔵文化財の取扱いについて文代財保護の立場から開発工事との調整を図るべく協議を行った。

また、北条町教育委員会は、鳥取県教育委員会事務局文化課及び鳥取県埋蔵文化財センターとこのことについて協議したところ、平成7年度に実施した試掘調査結果を参考にして本工事予定地内のうち、北条町曲字菅峯他にA、B、Cを（曲菅嶺長谷遺跡）曲字苅山にD区（曲233号墳）をそれぞれ設定し、工事着手前には事前の発掘調査を行い、記録保存することにした。

調査期間は平成8年4月8日から平成9年3月25日までとした。

第2章 位置と環境

北条町は、県の中央部を流れる天神川の左岸に位置し、東は天神川を隔て羽合町、西は大栄町、南は倉吉市と接し、北には日本海が広がっている。

古くは北条郷といわれ、上・中・下の3北条村に分かれていたが、1954(昭和29)年に中、下北条村が合併し、現在の北条町になる。町域は、東西約5.6km、南北約4.7km、面積20.99km²で、北部一北条砂丘、中央部一北条平野、南部一丘陵部から成っている。県下3大砂丘の1つ北条砂丘は日本海に面し、約1万年前の大山噴火堆積した火山灰に古砂丘が重なり、その上に古代遺物の包含層・クロスナ層があり、更に現在の新砂丘で覆われ砂丘が形成されている。代表的な砂丘遺跡に隣町の羽合町から発見された長瀬高浜遺跡があるが、本町からは江北浜北野神社付近の河川工事の際に土師器、須恵器、土馬、銅鏡、鏡片が出土した。また弓原浜、下神の採砂場からは弥生式土器、土師器片が出土（22、中浜遺跡）、その南には下神1号墳（23）も認められている。水田地帯が広がる北条平野は、低平な沖積平野で古くからの穀倉地帯であった。ここからは、1952(昭和27)年北条川付替工事の際、大量の縄文土器が出土した島遺跡（9）が発見されている。同じように土器等の検出があった米里船渡遺跡（11）、北尾遺跡（8）も水田下から発見されている。丘陵地帯には、遺跡分布図に見られるように、茶臼山古墳群（約55基・1）、北尾古墳群（約25基・5）、島古墳群（約6基）など、古墳が密集している県下有数の地域である。しかしながら明治以降は桑園化が進み、現在は梨や柿を栽培する果樹園として開墾されているため古墳や遺構が破壊され、今やその詳しい古墳の数や様子が分からない状態になっている。

時代を追って当地の人間生活をたどって見てみると、まず縄文時代の遺跡が平野部の低湿地に集中しており、当時の生活がここで営まれていたと考えられる。前述した島遺跡は、前期から後期に属する土器（爪形文や刺突文）が大量に出土し、島式として土器編年がなされ県内縄文遺跡の指標として編年に使用されている。その後の（1983年）災害復旧に伴う緊急調査で縄文時代前期から晩期まで全時期にわたる土器が出土しており、縄文土器の変遷をたどることができる。他にも丸木船・石器・貝類・イノシシ・シカ・イヌ等の獸骨やヤマトシジミ・マガキ・ハマグリなどがあり、当時の生活がしのばれる。

弥生時代の遺構は町内では今まで発見されていなかったが、今回の管峯長谷遺跡で弥生時代終末期の竪穴住居跡が検出されている。他にも曲第1（岡）遺跡（24）、北尾・島各遺跡で弥生土器が出土していることから、その周辺に遺構の存在が推定される。特に記しておかねばならないのは、米里の通称「藏合屋」（12）と呼ばれる畠地の流出した土砂中から弥生土器の壺と袈裟棒の銅鐸が発見されており、例にもれず当地でも弥生の祭祀が行われていたことが推察できる。

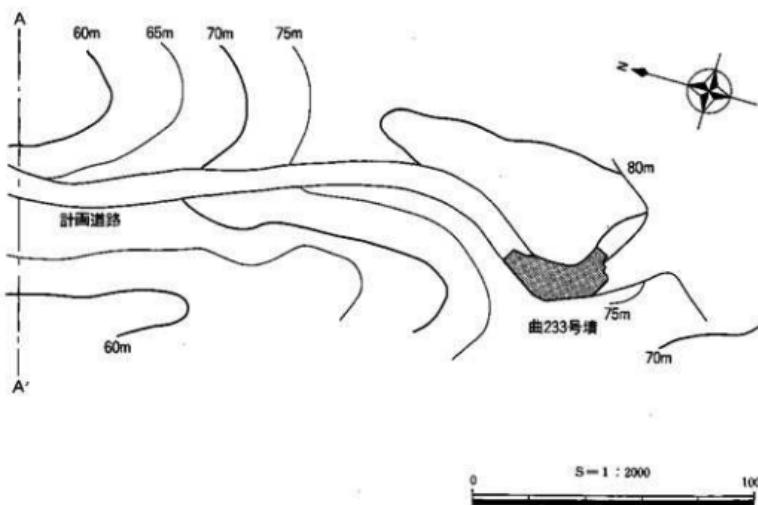
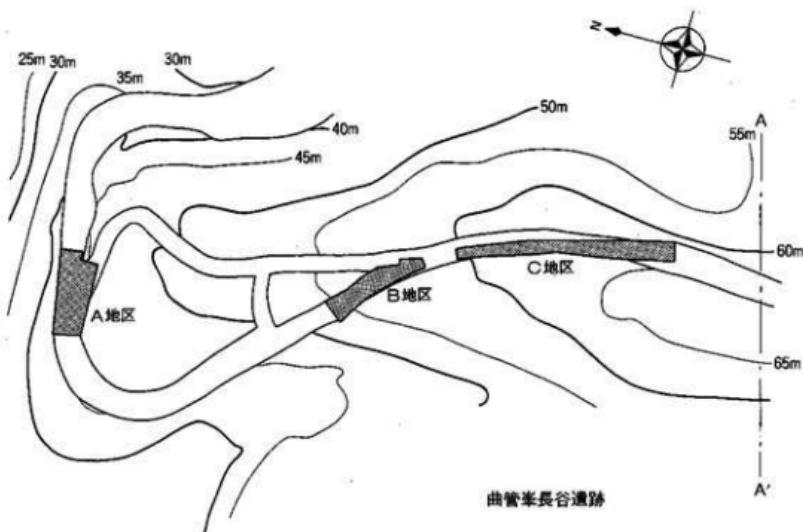
古墳時代に入ると、丘陵部の斜面を利用して墳墓が次々と造られた。前期前半には、曲148号墳（径20m・円墳）などが造られ、箱式石棺を主体部とした古墳が中心であった。中期には、同じく箱式石棺墓の土下129号墳（直径20m以上・方墳）などがあり、後期に入ると曲や土下、茶臼山、北尾といった所に小型の前方後円墳や大型の円墳を中心とした群集墳が盛んに築造された。中でも、土下古墳群に隣接してある土下213号墳（通称「やすみ塚」、全長約33m・前方後円墳・3）と土下210号墳（約17m・方墳）の周辺から、鹿を型どった埴輪が出土するなど、豊かな古墳文化が想像でき、当地域が倉吉とともに伯耆の中心的存在であったことが推定される。そこから200m離れて、終末期の横穴式石室（土下229号墳）が露見しており、魚の線刻が確認されている。生活跡としては、今回調査された管峯長谷遺跡から古墳時代中期の住居跡が3棟出土しており、また、蟻ヶ家山北麓の丘陵裾部緩斜面に位置する曲第1（岡）遺跡からは、後期の住居跡が検出されている。

歴史時代に入ると、茶臼山の城跡（21）及び延喜式内社国坂神社（伯耆四宮）、島には提城、北尾には京都石清水八幡宮の別宮である北条八幡宮が存在する。国坂神社はかつてこの地方の交通の要所であり、北条は豊富な穀倉地帯で漁業も盛んであったことなどから、これらを生活基盤として、荘園時代から中世、戦国期にかけて多くの人々の生活を支えていたことが想像される。

今回調査した管峯長谷遺跡（A）、曲233号墳（B）は蟻ヶ家山西側に位置する海龍王神社から本町曲地区までの農道を、県営西曲地区ふるさと農道整備事業として道路幅拡張するために発掘調査を実施したもので、曲233号墳においては墳丘部から箱式石棺1基、周溝内より箱式石棺1基を検出した。

今後の開発事業に伴って、多くの埋蔵文化財の発掘必要性が出てくると考えられるが、町内の詳しい歴史的環境の解明はこれからである。

なお、本文中の遺跡名の後に記した番号は、「北条町内遺跡分布図」また「一覧表」のものである。



挿図1 曲管峯長谷遺跡A区・B区・C区、曲233号墳位置図



插図2 北条町遺跡分布図

A. 管峯長谷遺跡	B. 曲233号墳	1. 曲古墳群
2. 土下古墳群	3. やすみ塚(土下213号墳)	4. 茶臼山古墳群
5. 北尾古墳群	6. 島古墳群	7. 天王山遺跡
8. 北尾遺跡	9. 島遺跡	10. 曲226号墳
11. 船渡遺跡	12. 米里銅鐸出土地	13. 米里第1遺跡
14. 米里第2遺跡	15. 天神川河床遺跡	16. 宇ノ塚遺跡
17. 殿屋敷遺跡	18. 馬場遺跡	19. 用露鼻遺跡
20. 長畠遺跡	21. 茶臼山要害	22. 中浜遺跡
23. 下神1号墳	24. 曲第1遺跡(曲岡遺跡)	

插表1 北条町内遺跡一覧表

第3章 調査の結果

第1節 調査の概要

調査地 調査地は舌状丘陵部のほぼ綫線上にあたり、現況は主として果樹園である。地形から、北側の裾部をA区とし、南部の丘陵上に向けてB区、C区（管峯長谷遺跡）、そして、最頂部に所在する古墳を曲233号墳と分割した。

調査面積 曲管峯長谷遺跡A区135m²、B区238m²、C区160m²。そして曲233号墳145m²で計678m²である。

A 区 まずB区の調査から開始し、続いてA区、C区を行い、曲233号墳を最終調査区とした。その結果A区では古墳時代中期頃の竪穴住居跡1棟を検出した。

B 区 弥生時代終末期の竪穴住居跡1棟を検出した。

C 区 古墳時代中期の竪穴住居跡2棟を検出した。

曲233号墳 石棺を主体部に、箱式石棺を周溝内にもつ古墳時代中期の古墳1基を検出した。なお、曲管峯長谷遺跡A区・B区・C区、曲233号墳では、いずれも若干の土器を検出している。

第2節 曲管峯長谷遺跡A区の調査

曲管峯長谷遺跡A区は標高41～45mを測る舌状丘陵地の突端部緩斜面にあたり、調査区の北西端で古墳時代中期と推定される竪穴住居跡1棟を検出した。遺物は土師器が出土している。

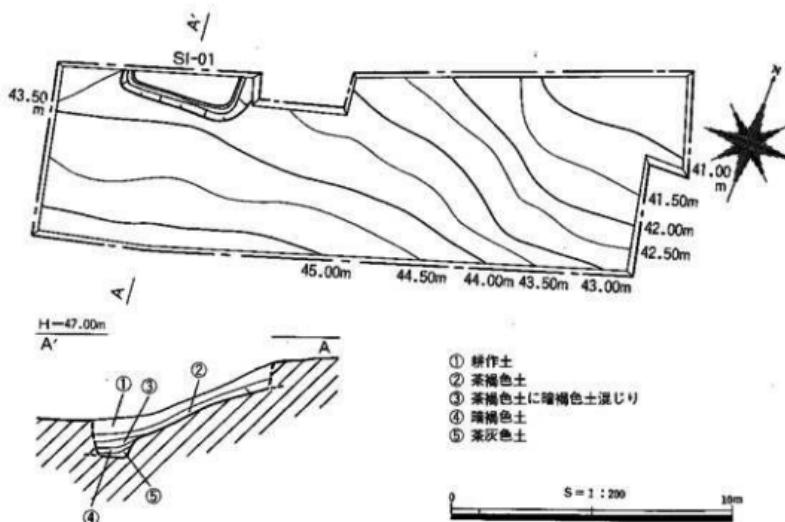
第1竪穴住居跡（図3）

位置 A区北西端に位置する。床面の平均標高は42.80mを測る。

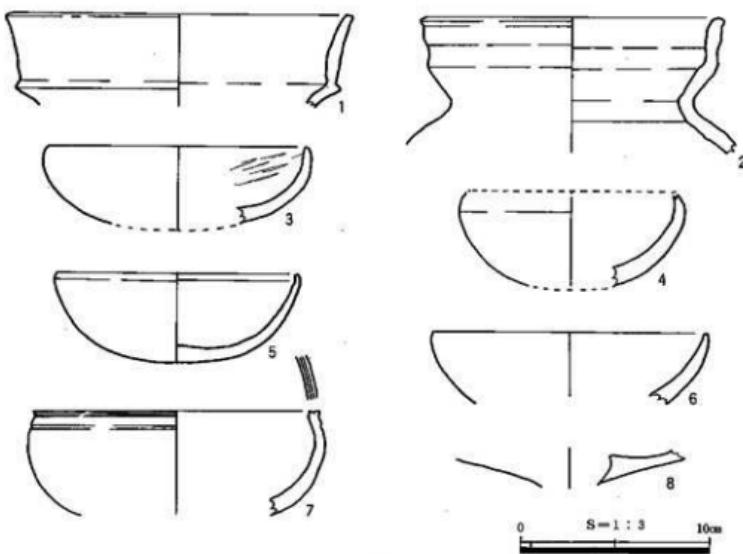
形態 調査区の関係から山側の一辺を検出したに留まるが、側溝等から平面方形プランと推測される。壁高は約40cmを測り、検出した床面は長辺3.8m、短辺0.4～1.2m、で床面積は2.7m²である。

柱穴 検出しなかった。

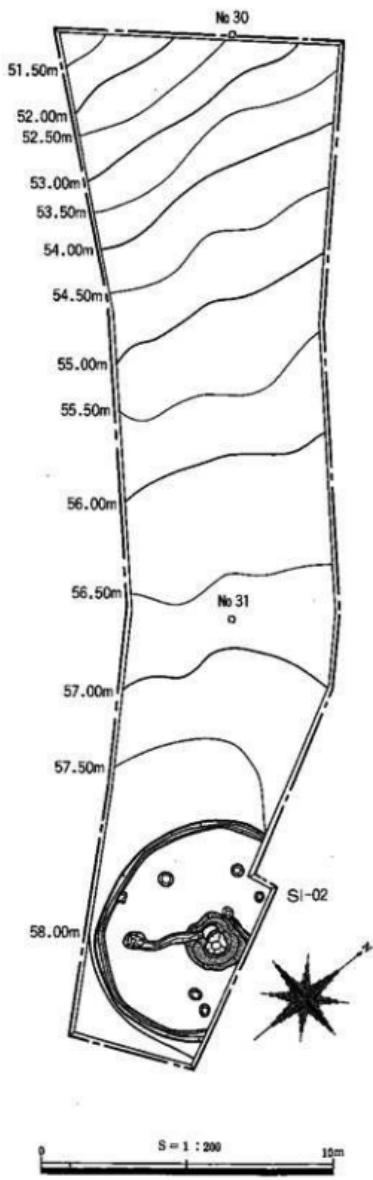
時期 遺物は全く出土しなかったため、時期は明確にし得ないが、周辺から退化した複合口縁をもつ土師器甕や土師器杯等が出土しており、本住居跡の形態を含めて考えると古墳時代中期後半頃と推察される。



插図3 曲管峯長谷遺跡A区全体遺構図



插図4 曲管峯長谷遺跡A区出土遺物実測図



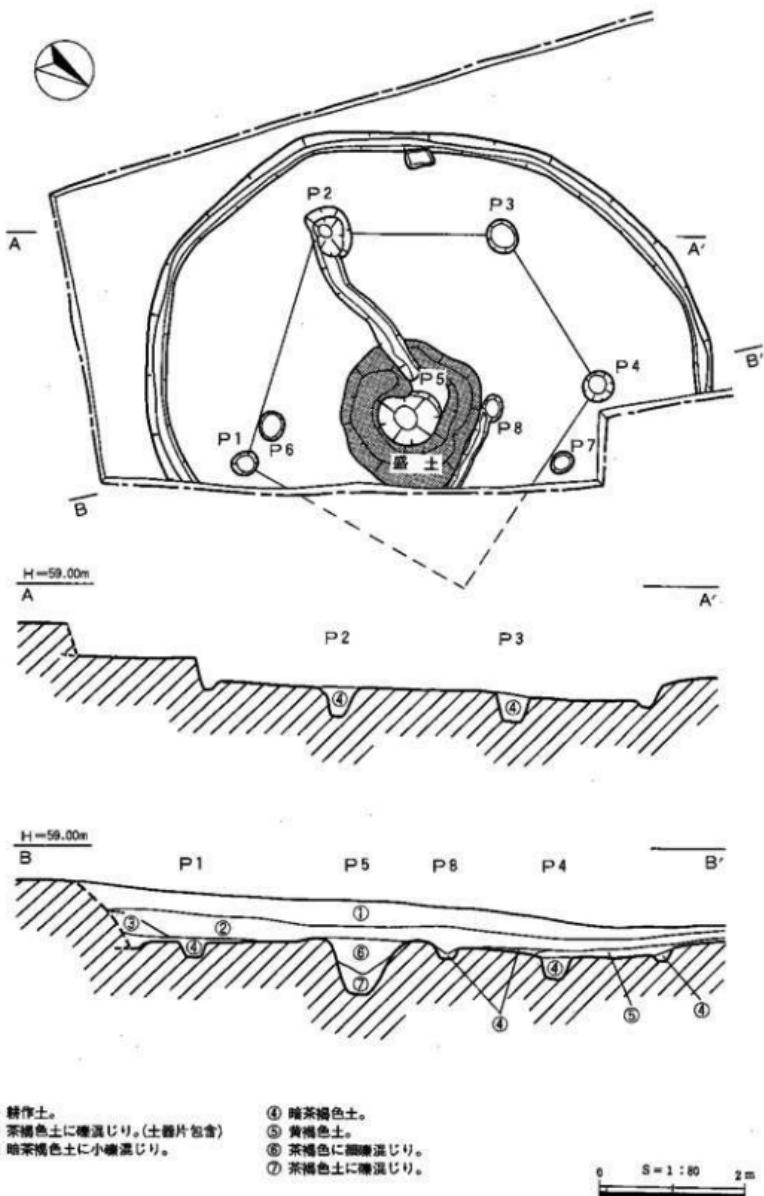
第3節 曲管峯長谷遺跡 B区の調査

曲管峯長谷遺跡B区は標高52~58mを測る舌状丘陵地稜線上平坦面から北西側斜面に位置し、北側に約90m距離を置き、下った所にA区がある。調査区の南東端の最頂部平坦面で弥生時代後期終末期の竪穴住居跡1棟を検出した。遺物は弥生土器甕・鼓形器台、須恵器杯身、土師器碗、石器などが出土している。

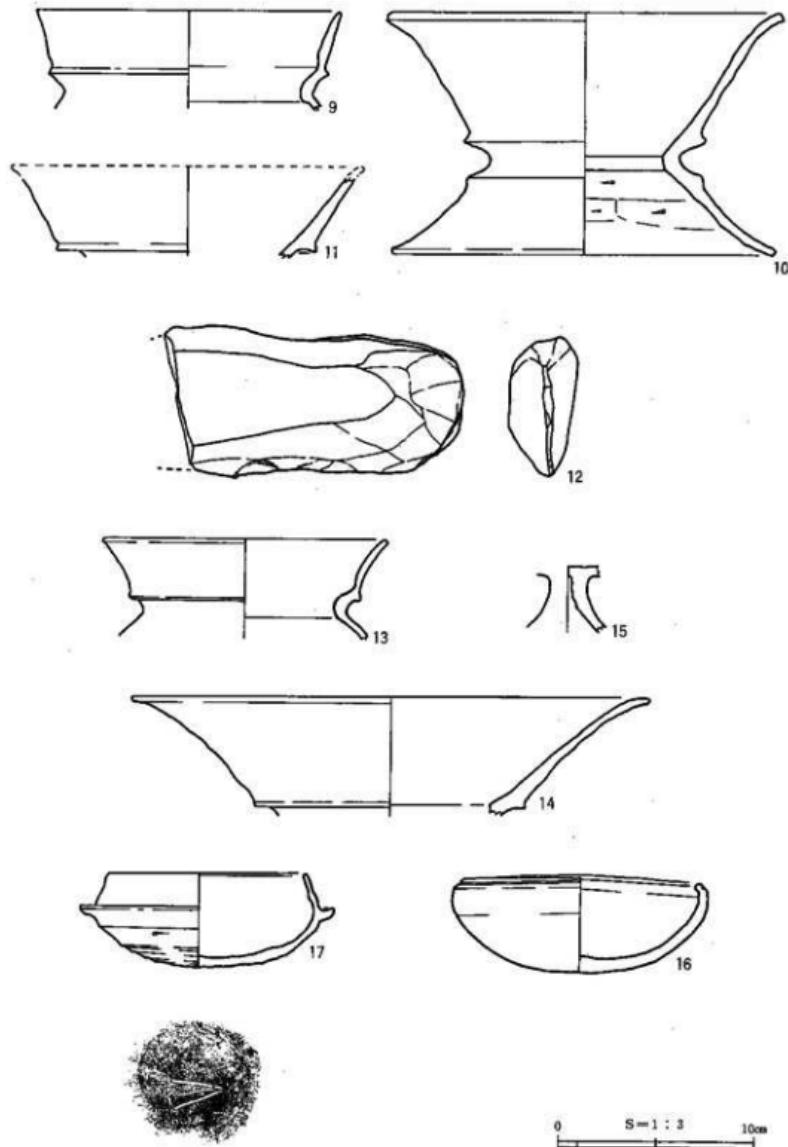
挿図5 曲管峯長谷遺跡B区全体遺構図

第2堅穴住居跡（挿図6・7、図版2）

- 位 置 B区南東端の標高58mを測る丘陵地稜線上平坦面に位置し、床面の平均標高は57.70cmを測る。
- 形 態 調査区の関係から全形は確認できなかったが、約半分以上の様相が分かった。南側の側壁、その側壁下を巡る側溝、そして床面である。これらから平面形は多角形に近いものと推定される。壁高は山側の南壁で最高36cmを測る。検出した床面は若干の凹凸はあるものの平坦で長辺7.20m、短辺4.62m、床面積24.75m²である。
- 側 溝 側溝は側壁下を巡り、幅20～6m、深さ8～5cm、断面U字形を呈す。
- 柱 穴 柱穴は検出した床面から7本確認された。このうち主柱穴はP1、P2、P3、P4の4本であるが、その配置から調査区外の北側に推定される1本を加え5本柱のプランが考えられる。規模はP1(38×32-21)、P2(70×52-43)、P3(48×42-49)、P4(42×40-35)cmを測り、柱穴間距離はP1～P2(3.00m)、P2～P3(1.86m)、P3～P4(2.00m)である。なお、P6・P7は補助柱穴で規模はP6(29×26-26)、P7(34×30-14)cmを測る。中央ピットP5の北側に接したP8は(28×20-15)cmである。
- 中央ピット 床面のほぼ中央と思われる所に特殊ピットP5(80×74-66)cmがある。これを取り巻くようにして幅50cm、厚さ4～5cmの周堤盛土が施されている。埋土は2層に分層されるが、炭化物、焼土ブロックはわずかに点在する程度である。なお、P2と中央ピットP5をつなぐ形で、しかもP2からP5に向けてゆっくりと水が流れる程の傾斜をもつ長さ2.00m、幅24～20cm、深さ6～4cmの小溝が1本検出されている。
- 遺 物 埋土中や床面から弥生土器壺9・弥生土器鼓形器台10・11、石器12が出土している。
- 時 期 出土遺物から弥生時代後期終末期（青木V・VI期並行期）と考えられる。



插図 6 第2竪穴住居跡遺構図



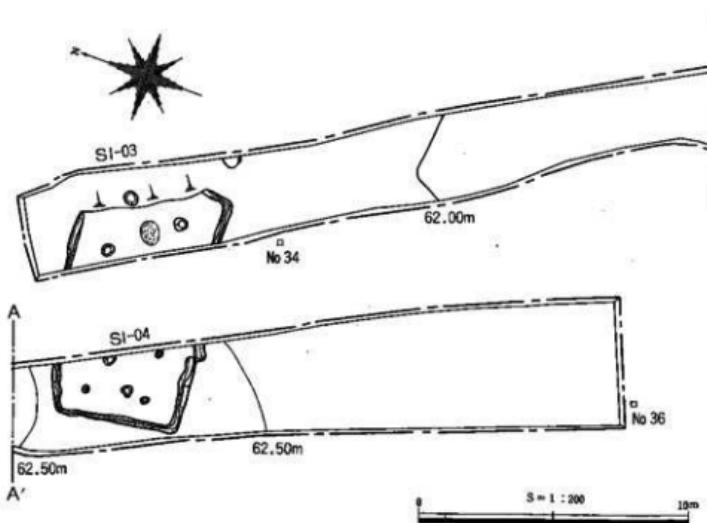
插図7 曲管塚長谷遺跡B区出土遺物実測図

第4節 曲管峯長谷遺跡C区の調査

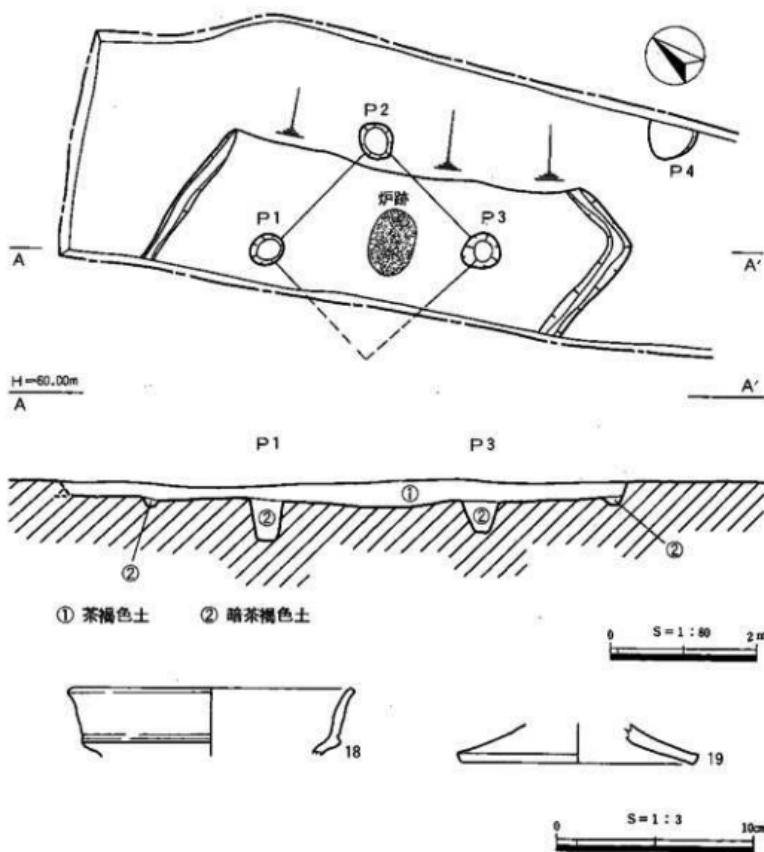
曲管峯長谷遺跡C区は標高61~63mを測る舌状丘陵地稜線上平坦面に位置し、本区の北西側約12m離れた所にB区がある。なお、本調査区は南北に78m、東西に6mの帶状を呈し、北端で古墳時代中期の竪穴住居跡1棟、中程よりやや南寄りの所で古墳時代中期の竪穴住居跡1棟を検出した。遺物は弥生土器甕・高杯・低脚杯などが出土している。

第3竪穴住居跡（挿図9）

- 位 置 C区北端の標高61mを測る丘陵上平坦地に位置し、床面の平均標高は60.70mを測る。本住居跡の南側約19mの距離を置き第4竪穴住居跡がある。
- 形 狀 調査区の関係と北東側床面が流出しているため全形は確認できなかったが、遺存する側溝から平面形は方形と推定される。壁高は南壁で最高25cmを測る。検出した床面はほぼ平坦で長辺（南北長）6.10m、短辺（東西長）1.70m、床面積9.51m²である。
- 側 溝 北側と南側に遺存し、幅20~5cm、深さ10~4cmを測り、断面U字形を呈す。
- 柱 穴 柱穴は床面から3本検出された。いずれも主柱穴と考えられ、その配置から4本柱のプランが考えられる。規模はP1(47×41-54)、P2(49×46-33)、P3(54×45-45)cmを測り、柱穴間距離はP1~P2で1.60m・P2~P3で1.50mである。
- 炉 跡 床面中央部で90×58cmの範囲の楕円形に赤く焼けた極めて浅い凹みを検出した。炉跡と思われる。



挿図8 曲管峯長谷遺跡C区全体遺構図



挿図9 第3竪穴住居跡遺構図・出土土器実測図

遺 物 床面中央の炉跡付近で土師器壺片、高杯などの細片が出土したが、固化できたのは
土師器壺口縁部18・高杯脚部19の2片に留まる。

時 期 出土遺物から古墳時代中期と思われる。

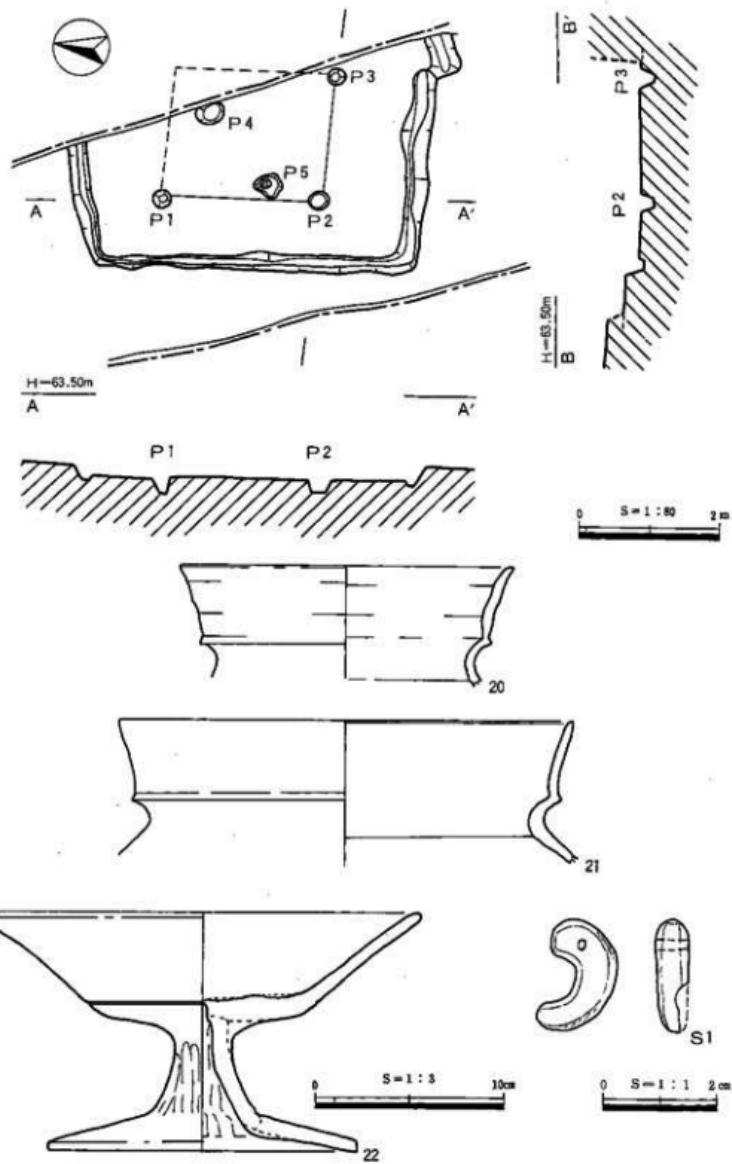
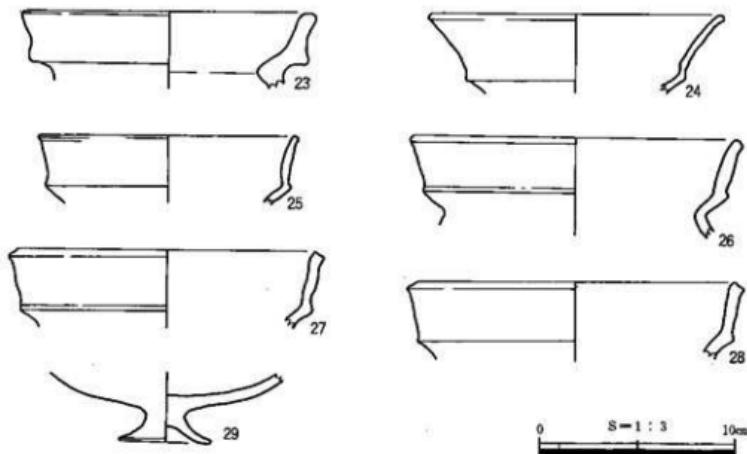


插图10 第4竖穴住居跡遺構図・出土器実測図

第4 穫穴住居跡（挿図10、図版3）

- 位 置** C区中程よりやや南寄りの平坦面に位置する。床面の平均標高は62.40mを測る。
- 形 態** 調査区の関係から全形は確認できなかつたが、半分以上の様相が分かった。「口」の字状を呈する側壁下を巡る側溝、床面である。これにより平面形は方形と推定される。壁高は山側の南側で最高32cmを測る。検出した床面は平坦で長辺（南北長）5.00m、短辺（東西長）3.52m、床面積10.22m²である。なお、南側側溝端には本住居跡に切り込まれた形で接した幅32cm、深さ8cm程の溝があるが、全形が全く不明なため性格等は分からぬ。
- 側 溝** 側溝は「口」の字状の側壁下を巡り、幅は最大で20cm、深さは最高8cmを測り、断面U字形を呈す。
- 柱 穴** 柱穴は床面から5本検出された。このうち主柱穴はP1、P2、P3の3本で、その配置から4本柱のプランが考えられる。規模はP1（26×24-26）、P2（30×26-17）、P3（26×24-22）cmを測り、柱穴間距離はP1～P2で1.96m・P2～P3で1.54mである。なお、P4、P5の規模は前者が（40×32-22）、後者が（38×34-15）cmを測るが、現況では性格等は不明である。
- 遺 物** 埋土中や床面から土師器壺片20・21、土師器高杯22が出土している。また、床面から全長2cmの勾玉1個を検出した。
- 時 期** 出土遺物22から古墳時代中期のものと考えられる。



挿図11 曲管峯長谷遺跡C区出土遺物実測図

第5節 曲233号墳の調査

曲233号墳は標高80mを測る舌状丘陵地基部に位置し、本古墳の北側約200m離れた所に曲管峯長谷遺跡C区がある。検出された遺構は古墳1基のみで、遺物は須恵器が出土している。

曲233号墳（擇図12・13・14・15・16、図版3・4・5）

立 地 丘陵尾根稜線上からやや西側に下った緩斜面に立地し、墳丘の西側は急斜面となっている。標高80mと北側の平野部を見おろす絶好の位置を占める。

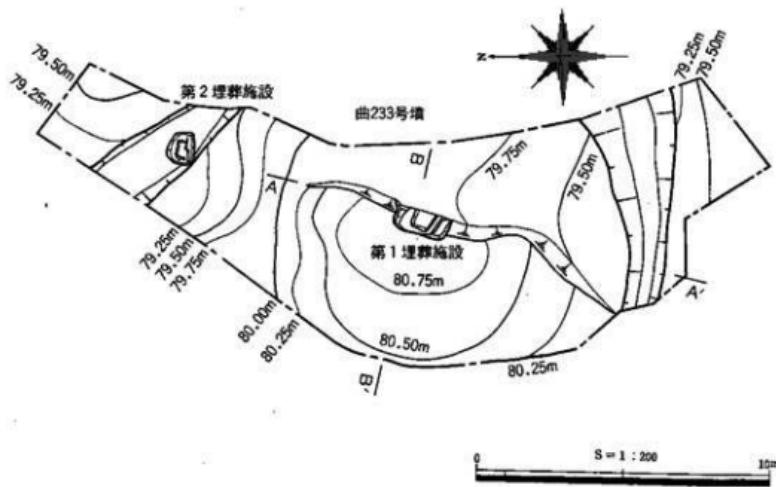
墳 丘 調査前の墳丘の規模は後世の耕作地開墾のため、大きく削平されており長径約9.7mと推定される。調査した曲233号墳は破壊をうけ、主体部は大きく露出しており、墳丘部は北東側から中心部を経て南西側へほぼ一直線に東側に向かって削平されている。そのため、封土は谷側にあたる西側を残すのみである。墳丘検出時の規模は長径（南北長）約15.0mを測るが、短径（東西長）は調査区の関係から不明である。したがって、墳丘部、周溝部とともに全形が確認できないため、平面形は方墳の可能性を残すものの、現況では不明である。高さは周溝底から最高1.60mを測る。

周 溝 周溝は調査区の関係から北側に約4.5m、南側に約7.0mと二方向で検出された。幅は南側で最大3.2m、深さ0.4mを測る断面逆台形のものを巡らせている。

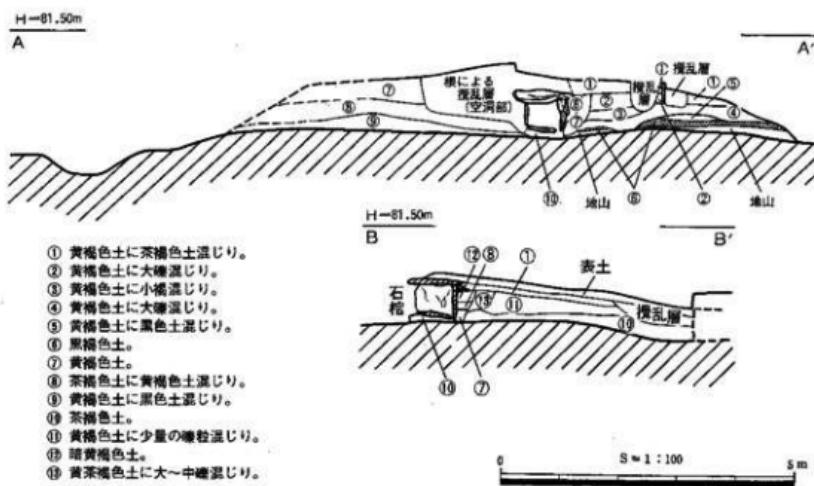
主 体 部 本古墳の主体部は周溝や墳丘盛土の遺存状態から、墳丘のほぼ中央に位置するものと推定される。主体部の形態は西側の石材が残存するのみで、東側は全く痕跡がなく、施設

施設 挖り方も不明瞭であるが、残存部から石棺と推定される。残存する墓塙掘り方の規模は東西1.05m、南北1.33mを測る方形を残し、深さは0.58mである。この中に主軸をN-11°-Eをとる石棺がある。1辺1mを測る隅丸方形の平石を蓋石として覆い、その下に側石2枚が小口石1枚をコの字状にはさむ形で密着して垂直に立っている。これらの石材はいずれも凝灰岩で1辺90cm、厚さ8cmの板石である。床面には2枚の板石が互いに一辺を重ねて置かれているが、このうち、小口側のものは側石に沿う形で縦方向に、側右側のものは南側側石を上に乗せ、横方向に敷かれている。その石棺の規模は長さ（東西長）80cm、幅（南北長）60cm、蓋石から床面までの深さは55cmを測る。棺内埋土は茶褐色腐植質土の単層で、墓塙内、棺内からは遺物は全く出土しなかった。

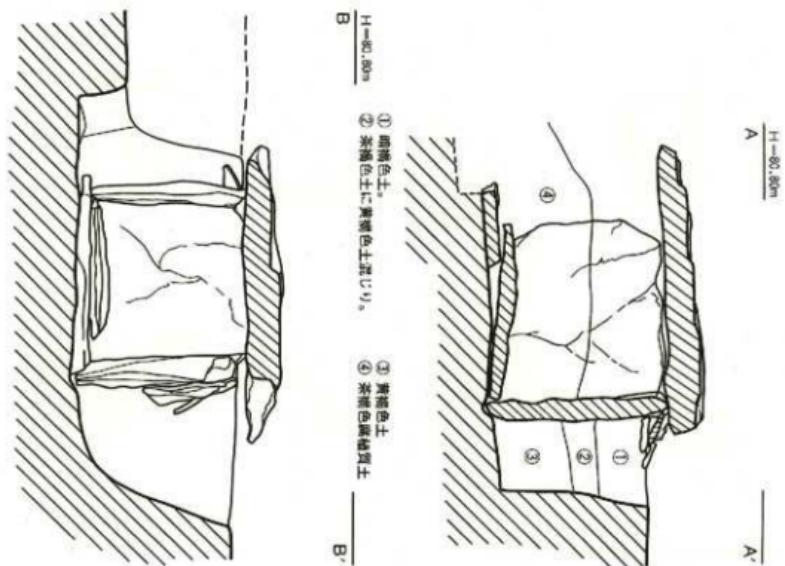
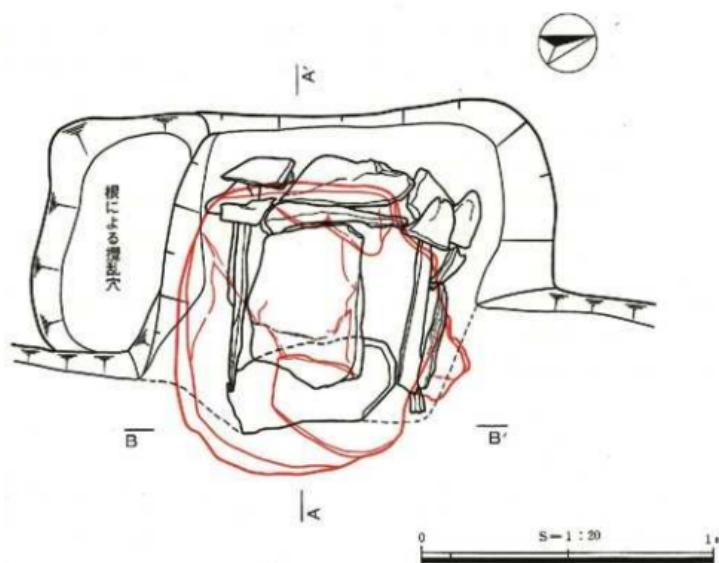
第2埋葬 北側周溝内からは小型の板石で造られた組合せ箱式石棺墓1基が検出された。墳丘中央部に位置する主体部からみると、北北東側に約7.5mの距離を置く。墓塙は素掘りで西側と北側が大きく破壊されている。平面形は長方形を呈し、規模は長さ（東西長）115cm、幅45cm、深さ22cmを測る。この中に組み合わされた石棺は東小口側に板状の蓋石が1枚残存するのみである。その下には底に棺床を残し周囲を掘りくぼめて、側石、小口石を垂直に立てている。側石は南側が2枚の板石の一辺を互いに重ね合わせている。北側は破壊のため1枚の板石が原位置を保っているが、これに接した西側に



插図12 曲233号墳全体遺構図



插図13 曲233号墳墳丘土層断面図



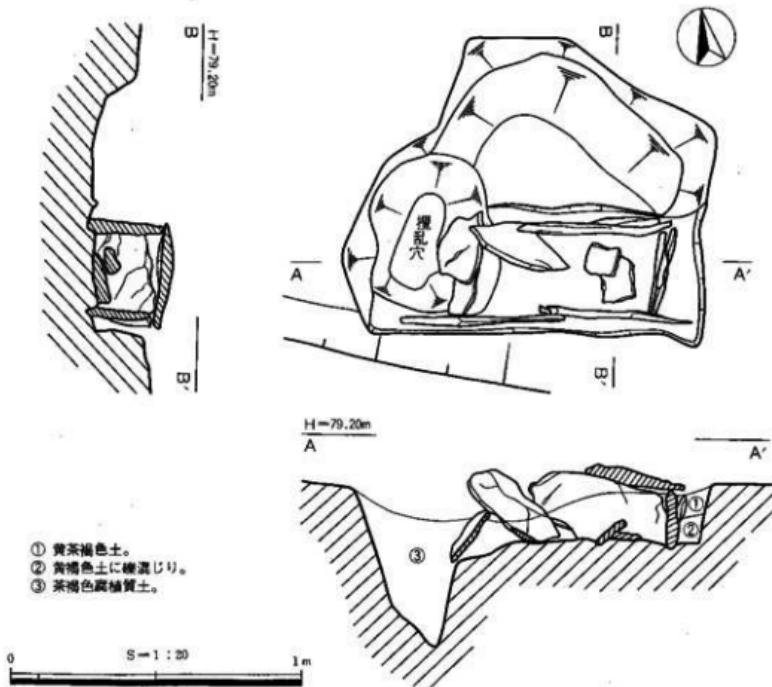
插図14 曲233号墳主体部石棺遺構図

あたる板石は破壊により棺内側に大きく倒れこんでいる。小口石は西側が破壊により棺内側に倒れこんでいるものの、東側は側石にはさまれた板石で原位置を保っている。その棺外側には小さな板石を密着させ補強していた。残存する石棺の規模は長さ（東西長）60cm、幅（南北長）28cm、側石上端から床面までの深さは24cmを測る。床面東側には小さな板石2枚が互いに2辺を重ねて置かれている。石枕と思われる。

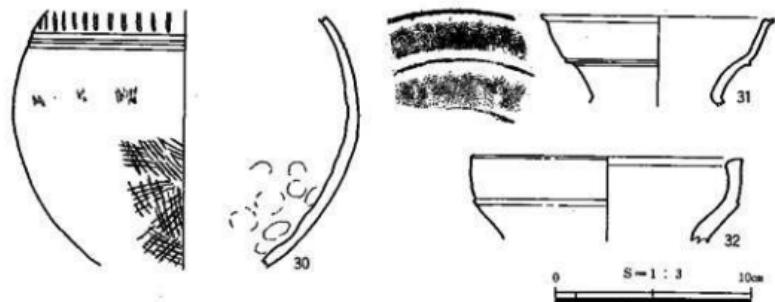
石棺内埋土は腐植質土の単層で、墓壙内、棺内ともに遺物は全く出土しなかった。

なお、石棺の主軸はN-7°-Eをとる。また、蓋石等の継ぎ目の目張り粘土は全く認められなかった。

- 遺 物** 埋葬施設内からは遺物は全く出土しなかったが、周溝内から須恵器甕31、土師器甕32などが出土している。
- 時 期** 出土遺物から古墳時代中期末頃のものと推定される。



插図15 曲233号墳周溝内箱式石棺造構図



挿図16 曲233号墳出土遺物実測図

第4章 まとめ

- 曲管峯長谷遺跡** 調査の結果、曲管峯長谷遺跡A～C区からは弥生時代終末期の竪穴住居跡1棟と古墳時代中期の竪穴住居跡3棟を検出した。これらの遺構のうち、遺物が伴出せず時期は推定の域をでないものもあった。
- 曲233号墳** 曲233号墳は調査区の関係から墳形ははっきりしないものの中期末頃のもので、主体部は石棺を用い、周溝内には小型の組合わせ箱式石棺を構築していた。
ここでは平成6年度から平成8年度に至る「曲地区」の発掘調査結果を踏まえ、概観を述べ、若干の考察を試みたい。
- 平成6年** 平成6年度には曲古墳群を後背に仰ぐ曲第1遺跡（曲岡遺跡）及び、倉吉市との町境に位置する曲226号墳の調査を行った。
- 平成7年** 平成7年度は曲古墳群内に位置する曲小山ヶ谷遺跡、曲宮ノ前遺跡及び曲55号墳、曲234号墳、曲235号墳の調査を行った。
- 平成8年** 今回の曲管峯長谷遺跡並びに曲233号墳の調査である。
- 度**
- 曲第1遺跡** 標高37～38m前後の丘陵裾部緩斜面で古墳時代後期の平面方形の竪穴住居跡3棟、段状造構5基、溝状造構3本などが検出されている。
- 曲226号墳** 標高80m前後の丘陵裾部に立地する径11.5mの横穴式石室を主体とする古墳時代後期の古墳で、破壊を受け、石室は大きく露出し封土の流出も大きかった。
- 曲小山ヶ谷遺跡** 標高60m前後の丘陵裾部平坦面で古墳時代前期の平面長方形の竪穴住居跡1棟が検出された。
- 曲宮ノ前遺跡** 曲小山ヶ谷遺跡の南西側で約100mの距離を置く標高68～73mを測る丘陵部緩斜面に立地し、古墳時代終末期の平面方形の竪穴住居跡1棟、段状造構1基などが検出されている。

曲55号墳・曲宮ノ前遺跡の南西側で約210m離れた別の丘陵緩斜面部で標高は68~73mを測る。
234号墳・3基とも近接して構築されており、曲55号墳は径13.5mの円墳、曲234号墳は墳丘部
235号墳が削平された径5mの小さな円墳、曲235号墳も同様に墳丘部が削平された径10m以上の円墳で3基とも古墳時代中期のものである。

弥生時代 以上のように「曲地区」に所存する遺跡は大きく分けて弥生時代終末期、古墳時代前期、古墳時代中期、古墳時代後期の4つの時代別に区分できよう。

本地区的遺跡の初現は出土した土器より弥生時代後期前葉（曲第1遺跡）であるが当該地からはこの時代の遺構は見つかっていない。ようやく弥生時代終末期（青木V・VI期）に多角形プランで中央ピットをもつ竪穴住居跡が1棟見つかったのみである（曲管峯長谷遺跡）。県内の弥生時代後期の集落の様相をかい間みると、青木遺跡を始め、丘陵上平坦面や斜面部に展開する集落が圧倒的に多い。平面形は円形から隅丸方形・多角形へと変遷し、床面中央に特殊ピットをもつ例が多い。中には尾高浅山遺跡のように三重の環濠をもつ高地性集落も出現している。当地のものは竪穴住居跡1棟のみで集落とは言いきれないが、周辺の様相からしてこの時代の集落が営まれていたのは否定できないものであろう。山上に居を構えるという不便な立地条件が示すように争乱の時代のひとこまを現わすものではなかろうか。

古墳時代後期 曲小山ヶ谷遺跡では丘陵裾部で平面長方形の竪穴住居跡が見つかっている。弥生時代後期の争乱期を経たにもかかわらず、依然として丘陵部に居を構えているわけであるが、県内の様相も例外ではない。ただし、集落の規模は縮少され、点在的になってくる。当地のものは山上ではなく裾部と言うところに、土地条件の制約のもとに営まれたものと解されるであろう。

古墳時代中期 曲管峯長谷遺跡で平面方形の竪穴住居跡3棟が見つかっている。古墳時代前期に統き、土地条件の制約のもとに営まれたものであろう。時を同じくして、曲55号墳・234号墳・235号墳、曲233号墳と言った比較的小規模な古墳が次々と構築されている。主体部の様相は明確ではないが、副次埋葬施設として組合わせ箱式石棺室、石蓋土壙墓がみられた。曲地区では本遺跡から距離を置く「真額地内」でも標高103m前後の丘陵上に古墳時代前期前葉から後葉に至る時期の古墳（曲148・149・151・221号墳）で箱式石棺を中心としたものが見られた。この中で曲151号墳では埋葬施設が墳丘中央部のものと、周溝内のものに分かれ、しかも前者が規模が大きく、後者が小さいと言う報告がなされている。小型のものは幼児の埋葬施設と考えられ、成人と幼児の埋葬空間が明確に区別されている。当遺跡の曲233号墳・55号墳でもその傾向が見られた。これにより曲地区では古墳時代前期から少なくとも中期までは箱式石棺、石蓋土壙墓と言う葬法が一貫して行なわれたと推察できよう。また、同一丘陵上に住いと墓が造営されているが、これらはお互いに距離を置くようで、墓は一段高い所を占地し、住まいは確実に立地を制約され地形の変化に応じて住まいと墓域を区別しているよう

であり、それは続く後期にも言える事である。

古墳時代 後期 曲第1遺跡では丘陵裾部で平面方形の竪穴住居跡3棟、曲宮ノ前遺跡で平面方形の竪穴住居跡1棟が見つかっている。いずれも時期は7世紀代であり、この時代にも前期、中期と同様に人口増加現象に伴う土地条件の制約のもとに營まれたものと言えよう。同じ頃、曲226号墳が構築されている。横穴式石室を主体とするもので、大きく破壊されているとは言え、玄室内には奥壁に密着するように入口に向って口を開いたコの字状に板石を組み合わせた施設で、床面に砾を敷いたと考えられるものが認められた。同じ天神川中流域にみられる三明寺古墳と同様の形態をとるものと言えよう。

ところで、曲古墳群では235基もの古墳が確認されているが、この中に実際に発掘調査が行なわれたのは10基にも満たない。しかも、その資料は断片的であり、本質をうかがうものも少ないが、古墳の埋葬形態が大きく2つに分類することができよう。1つは古墳時代前期から後期にかけての箱式石棺を主体とするもの、一方は古墳時代後期の横穴式石棺を主体とするものであり、これらは後期前葉の一時期、古墳の数は激減し、後葉から再び激増する。その背景には一極権力集中化に伴う大きな社会変化があるのは予想しうる事であるが、今後はさらなる古墳、集落の調査を待って、さらに検討を加えたいと思う。

第5章 おわりに

今回の調査は農道計画地内という限定されたものであり、各遺跡とも全容をつかむには程遠いと言う感がある。しかしながら、成果があったのも事実で当地域の弥生時代から古墳時代の流れの一端を知ることができた。本町は県内でも有数の古墳密集地であり、今後の調査の行末が問われるところである。

最後に、調査にあたって円滑な作業が実施できたのは、地元曲地区をはじめ、発掘に参加していただいた方々、並びに整理作業に従事していただいた方々の献身的な協力と、鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化センターを始め、この調査にご協力いただいた方々のおかげであり、末筆ながらこれらの方々に感謝の意を表します。

観察表

品種	土器番号	挿図	図版	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	備考
土師器 甕	1	4		復口径 18.4	口縁部破片。複合口縁で外反して立ち上がり、口縁端部は角張る。	内外面共にナデ。	小砂を含む細粒。	良 好	乳白色	A 区 遺溝外
土師器 甕	2	4		復口径 16.0	口縁部へ肩部破片。退化した複合口縁でやや外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸みをもつ。	口縁部内外面共にナデ 内外頸部以下ケズリ。	0.5~1mm径の石英を含み密。	良 好	乳白色	A 区 遺溝外
土師器 杯	3	4		復口径 13.8	楕状の杯部破片。内溝して立ち上がり、口縁端部はすぼまる。内面に暗文。	内外面共にナデ。	細砂を含む。	良 好	赤褐色	A 区 遺溝外
土師器 杯	4	4		復口径 (10.8)	楕状の杯部破片。	内外面風化のため調整不明。	1~2mm径の長石、石英を含む。	良 好	橙褐色	A 区 遺溝外
土師器 杯	5	4		復口径 13.8 器 高 さ 4.7	楕状の破片で、口縁部は内側に折れ込み、口縁端部は丸くおさめる。	内外面共にナデ。	細粒	良 好	黄褐色	A 区 遺溝外
土師器 杯	6	4		復口径 14.6	楕状の杯部破片。	内外面共にナデ。	細砂含む。	良 好	淡赤褐色	A 区 遺溝外
土師器 杯	7	4		復口径 15.0	楕状の杯部破片。口縁部外面に二条の浅い沈線、口縁端間に一条の浅い沈線を巡らす。	内外面共にナデ。	細粒	良 好	肌色	A 区 遺溝外
土師器 杯	8	4		—	杯部破片。	内外面共に風化のため不明。	細粒	良 好	橙色	A 区 遺溝外
赤生土器 甕	9	7		復口径 15.5	口縁部破片。外傾して立ち上がる複合口縁で、口縁端部はすぼまる。	口縁部内外面共にナデ。内外頸部ケズリ。	細粒	良	黄色	B 区 S I - 0 2
赤生土器 鉢形器台	10	7		復口径 19.6 復 高 さ 12.4	受部・脚部共に破片。両部は短い。	受部内外共にナデ。脚部外面ナデ内面ケズリ。	1~3mm径の長石、石英を含む。	良 好	黄茶色	B 区 S I - 0 2
赤生土器 鉢形器台	11	7		—	受部破片。	内外面共に風化のため調整不明。	石英を含む。	良	明黄色	B 区 S I - 0 2
石製品	12	7		最大長 15.2 最大幅 7.5 最大厚 3.7	加工した平坦面をもつ青灰色安山岩。				青灰色	B 区 S I - 0 2
赤生土器 甕	13	7		復口径 14.2	口縁部破片。外反して立ち上がる複合口縁で、端部は丸くおさめる。器底は薄い。	口縁部内外面共にナデ。内面頸部以下ケズリ。	0.1mm径の長石ところどろ含む。	良 好	黄褐色	B 区 遺溝外
赤生土器 甕	13	7		復口径 14.2	口縁部破片。外反して立ち上がる複合口縁で、端部は丸くおさめる。器底は薄い。	口縁部内外面共にナデ。外面頸部以下ケズリ。	0.1mm径の長石ところどろ含む。	良 好	黄褐色	B 区 遺溝外
赤生土器 鉢形器台	14	7		復口径 26.4	受部の破片。	内外面共にナデ。	1mm径以下の長石、石英を含む。	良 好	外面 黄褐色 内面 黄桃色	B 区 遺溝外
土師器 脚	15	7		—	脚部の破片。	外表面風化のため調整不明。内面にケズリ。	1mm径以下の石英ところどろ点在。	良 好	淡黄色	B 区 遺溝外
土師器 柄	16	7		口 径 12.0 深 さ 5.0	完形品。口縁端部を内側に折り込み、外面に浅い一条の沈線を巡らす。	内外面共にナデ。	石英、長石、白雲母を含む。	不 良	橙色	B 区 遺溝外

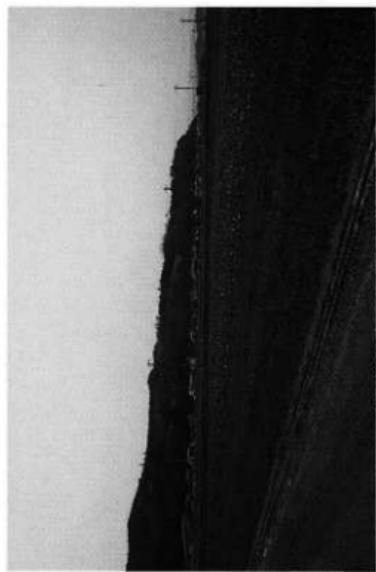
品種	土器番号	持団	図版	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成保存	色調	備考
土師器 甕	18	9		復口径 14.0	口縁部の破片。外傾し、外反気味に立ち上がる複合口縁で、口縁部は角張る。下段の後は丸み。	内外面共にナデ。	1~2mm径の長石、石英を含む。	良 好	淡黄橙色	C 区 S I - 0 3
土師器 脚	19	9		復口径 11.7	脚部の破片。	内外面共にナデ。	微細砂粒含み密。	良 好	外面 暗黄褐色 内面 黄色	C 区 S I - 0 3
土師器 甕	20	10		復口径 17.6	口縁部の破片。外傾し、外反気味に立ち上がる複合口縁で、口縁部はややすぼまる。	内外面共にナデ。	細粒。	良	黄色	C 区 S I - 0 4
土師器 甕	21	10		復口径 24.0	口縁部の破片。外傾気味に立ち上がる複合口縁で、端部はやや角張る。	口縁部内外面共にナデ。 内面端部以下ケズリ。	黒母、石英を含む。	普 通	黄肌色	C 区 S I - 0 3 4
土師器 杯	22	10		復口径 22.8 高 12.8 復底径 16.5	杯部は段をもつ。口縁端部はやや角張る。 脚部の端部は角張る。	脚部内外面共にミガキ、内面しばり目。 他の風化により調整不明。	小砂を含む細粒	良	黄橙色	C 区 S I - 0 4
赤生土器 甕	23	11		復口径 14.4	口縁部破片。やや外傾して立ち上がる複合口縁で、口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面共にナデ。 内面端部以下ケズリ。	1~2mm径の長石 石英を含む。	普 通	内外面 淡黄橙色 断面 暗褐色	C 区 遺溝外
土師器 甕	24	11		復口径 15.0	口縁部の破片。外反して立ち上がる複合口縁で、口縁端部は丸味をもつ。	内外面共に風化のため調整名不明。	密。	普 通	明赤褐色	C 区 遺溝外
土師器 甕	25	11		復口径 13.0	口縁部破片。やや外傾気味に立ち上がる複合口縁で、口縁端部はやや角張る。	内外面共に風化のため調整名不明。			黄褐色	C 区 遺溝外
土師器 甕	26	11		復口径 16.4	口縁部破片。外傾して立ち上がる複合口縁で、口縁端部は外側にやや肥厚する。	内外面共に風化のため調整名不明。	細砂含む。		黄褐色	C 区 遺溝外
土師器 甕	27	11		復口径 15.2	口縁部破片。外傾して立ち上がる複合口縁で、口縁端部は斜め下方に向かって平坦面をなす。	口縁部内外面共になで、 端部は斜め下方に向かって平坦面をなす。	1~4mm径の長石、 石英を多く含む。	良 好	黄茶色	C 区 遺溝外
土師器 甕	28	11		復口径 16.0	口縁部破片。外傾して立ち上がる複合口縁で、口縁端部は斜め下方に向かって平坦面をなす。	口縁部内外面共にナデ。	1mm程度の長石、 石英を多く含む。	良 好	黄灰茶色	C 区 遺溝外
土師器 脚 杯	29	11		復底径 4.6	杯部→脚部の破片。碗状の杯部。	内外面共に風化のため調整名不明。			赤褐色から黄灰色	C 区 遺溝外
須恵器 甕	30	16			周部破片。球状の胸部。	外底肩部に瘤みみ、その下に2条の沈線を造り、下にはタスキの跡。内面剥離ナデ、指壓圧痕。		良 好	暗灰色	曲 2 2 3 号埴
須恵器 甕	31	16		復口径 11.8	口縁部破片。口縁端部を外側につまみ出し、外側に波状文を造らす。	内外面共に回転ヨコナデ。	緻密。	良 好	暗青灰色	曲 2 2 3 号埴
土師器 甕	32	16		復口径 13.8	口縁部破片。直立て立ち上がる退化した複合口縁で、口縁端部は内側にわざかに肥厚し、平面面をなす。	口縁部内外面共にナデ。	緻密。	良 好	淡黄褐色	曲 2 2 3 号埴
勾玉	S1	10		最大 長 径 最 大 半 径 0.6						C 区 S I - 0 4

報告書抄録

ふりがな	まがりいせきぐんはつくつちょうぎほうこくしょ							
書名	曲遺跡群発掘調査報告書2							
副書名								
卷次								
シリーズ名	北条町埋蔵文化財報告書							
シリーズ番号	22							
編著者名	清水直樹、松本哲							
編集機関	北条町教育委員会							
所在地	〒689-21 鳥取県東伯郡北条町土下112 TEL 0858-36-3111							
発行年月日	西暦1997年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
曲管峯 長谷遺跡	鳥取県東伯郡 北条町曲字 管峯他	31366	35° 28' 46"	133° 47' 34"	1996 04 ~1997 03	533	県営西曲地区ふるさと農道緊急整備事業	
曲233号墳	北条町曲字 苅山	タ	35° 28' 33"	133° 47' 388"	1996 04 ~1997 03	145		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
曲管峯 長谷遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	住居跡 4棟	弥生土器、土師器 甕、杯、高杯 須恵器杯身、勾玉				
曲233号墳	古墳	古墳時代	箱式石棺 2基 周溝	土師器甕 須恵器甕				

図版

図版1



曲管峠長谷道跡遺景（北から）



A区東側完掘状況（東から）



A区西側完掘状況（西から）



A区 SI-01土層断面（東から）

図版2



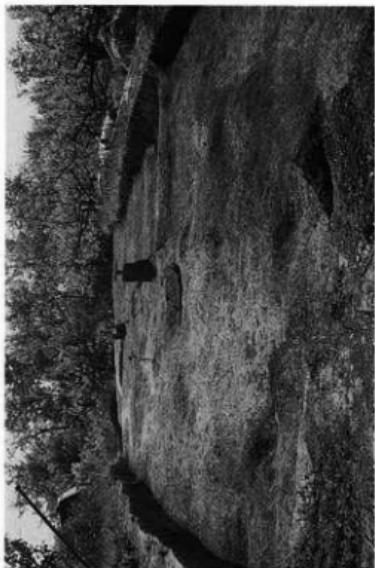
日区 SI-02 完損状況（北面から）



日区 SI-02 完損状況（東から）



日区 SI-02 中央ピット完損状況（東から）



日区北西側完損状況（北西から）

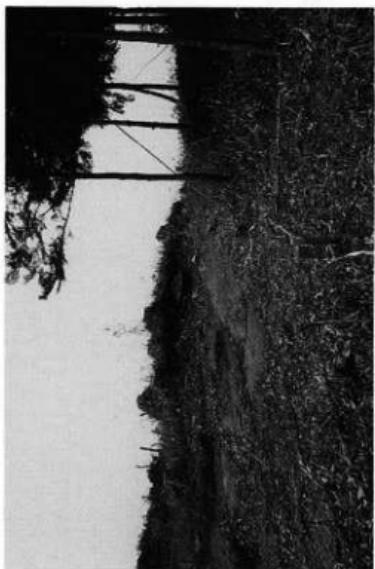
図版3



C区 SI-04 完掘状況（北から）



C区 SI-04 完掘状況（南から）



曲233号墳遠景（西南から）



曲233号墳主体部調査前（東から）

図版4



曲233号墳検出状況（東から）



曲233号墳主体部検出状況（東から）

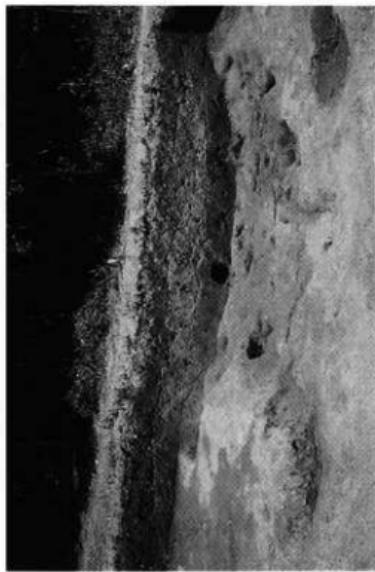


曲233号墳主体部検出状況（東から）



曲233号墳主体部完掘状況（東から）

図版5



曲233号墳南側周溝部土層断面（西から）



曲233号墳周溝内石棺状況（東から）

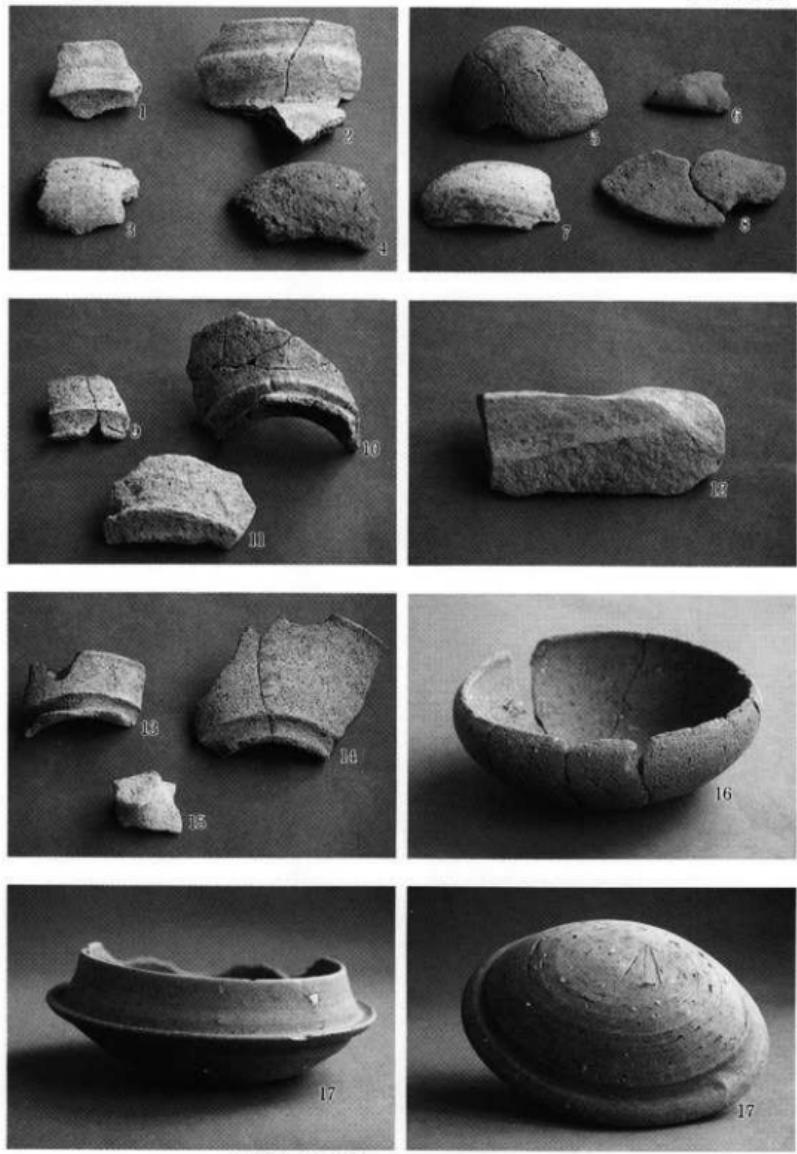


曲233号墳周溝内石棺完掘状況（西から）



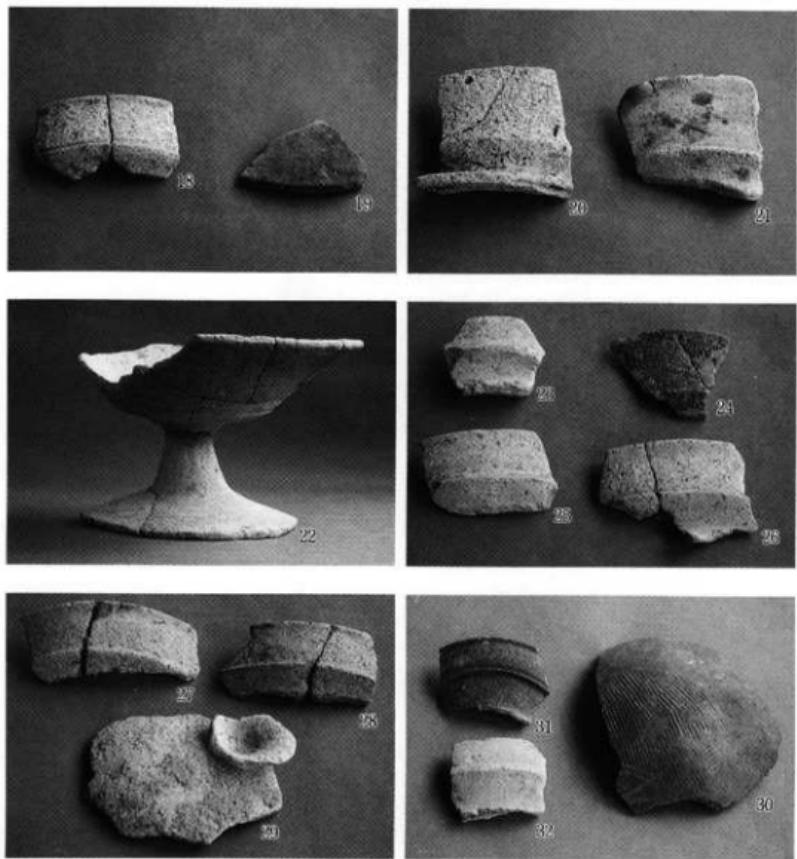
曲233号墳周溝内石棺完掘状況（西から）

図版6



管峯長谷遺跡A区、B区出土遺物

図版7



管峯長谷遺跡C区、曲233号墳出土遺物

平成9年3月印刷
平成9年3月発行

北条町埋蔵文化財報告書22
曲遺跡群発掘調査報告書2

編集 烏取県東伯郡北条町土下112
発行 北条町教育委員会
印刷 有限会社矢積印刷
製本 烏取県倉吉市宮川町2-36